高島野十郎（たかしまやじゅうろう）

1890（明治23）年－1975（昭和50）年

福岡県御井郡合川村（現・久留米市）の裕福な酒造家であった高嶋家の五男に生まれる。本名は彌壽（やじゅ）。福岡県立中学明善校（現・明善高等学校）に学んだ頃から絵に目覚め、旧制第八高等学校（現・名古屋大学）を経て東京帝国大学農学部水産学科を首席で卒業するものの、画家の道を選んだ。以後も独学で絵を学び、美術団体にも属すことはなかった。生涯独身で都内の渋谷や青山で多くを過ごすも、70歳を過ぎて千葉県柏市の田園のなかに水道も電気もない小さなアトリエを建て生活を始め、以降亡くなるまで描き続けた。享年85歳。

《絡子をかけたる自画像》（部分）
大正9（1920）年　福岡県立美術館

関連イベント

講演会①
「高島野十郎とは誰か―没後50年展がひらく新たな全貌」
日時：2026年3月25日［水］14:00–15:30（開場13:30）
登壇者：高山百合（福岡県立美術館 学芸員）
会場：大阪中之島美術館 1階ホール　定員：150名（先着順、事前申込不要）
参加費：無料 ＊ただし本展観覧券（利用後の半券可）が必要

講演会②
「高島野十郎と夜景表現の系譜」
日時：2026年4月29日［水・祝］14:00–15:30（開場 13:30）
登壇者：宮下規久朗（神戸大学 教授）
会場：大阪中之島美術館 1階ホール　定員：150名（先着順、事前申込不要）
参加費：無料 ＊ただし本展観覧券（利用後の半券可）が必要

講演会③
「高島野十郎、その魂の旅」
日時：2026年5月30日［土］14:00–15:30（開場13:30）
登壇者：西本匡伸（福岡県立美術館 特任学芸員）
会場：大阪中之島美術館 1階ホール　定員：150名（先着順、事前申込不要）
参加費：無料 ＊ただし本展観覧券（利用後の半券可）が必要

観覧料

	一　般	高大生
当　　日	1800円	1200円
前売・団体	1600円	1000円

【前売券 販売期間】
2026年1月14日［水］10:00–3月24日［火］23:59

【主なチケット販売場所】
大阪中之島美術館チケットサイト
展覧会公式オンラインチケット（etix）
ローソンチケット（Lコード：53689）

【チケットの詳細】
大阪中之島美術館公式サイト
https://nakka-art.jp/exhibition-post/yajuro50/

＊税込価格 ＊中学生以下無料 ＊団体料金は20名以上。団体鑑賞をご希望になる場合は事前に大阪中之島美術館公式サイトからお申込みください ＊学校団体の場合はご来場の4週間前までに大阪中之島美術館公式サイト学校団体見学のご案内からお申込みください ＊障がい者手帳などをお持ちの方（介護者1名を含む）は当日料金の半額（要証明）。ご来館当日、2階のチケットカウンターにてお買い求めください。（事前予約不要）＊本展は、大阪市内在住の65歳以上の方も一般料金が必要です ＊日時指定制ではありません。展示室内が混雑した場合は、入場を規制する場合があります ＊災害などにより臨時休館する場合があります

学芸員によるギャラリートーク

日時：2026年4月15日［水］、5月26日［火］ いずれも11:00–11:45
定員：25名　参加費：無料＊当日、本展の展示室にご入場いただくための観覧券が必要
申込：大阪中之島美術館公式サイトよりお申込ください。2026年3月16日［月］10:00より受付開始

大阪会場限定　グッズ付きチケット

《蝋燭》ガラスコップ付きチケット 3,000円（税込）一般のみ・数量限定　＊画像はイメージです

代表作である《蝋燭》をプリントした大阪会場限定のガラスコップです。蝋燭の炎と展覧会ロゴの部分は半透明になっていて、注いだ飲みものに合わせて色が変わります。
サイズ：最大口径約8cm×高さ約10cm　参考容量：約300cc
＊耐熱ガラスではありません。ご使用の際はご注意ください

【販売期間】2026年1月14日［水］10:00–3月24日［火］23:59
【販売場所】展覧会公式オンラインチケット（etix）、ローソンチケット
＊グッズは本展会期中・開館日・開場時間に本展会場内特設ショップレジカウンターでお引き換えください
＊限定数に達しない場合のみ、グッズは会場内特設ショップで販売予定です（会場販売価格：税込1,650円）

音声ガイド

お一人様　1台700円（税込）　ナビゲーター：窪田涼子（ナレーター）

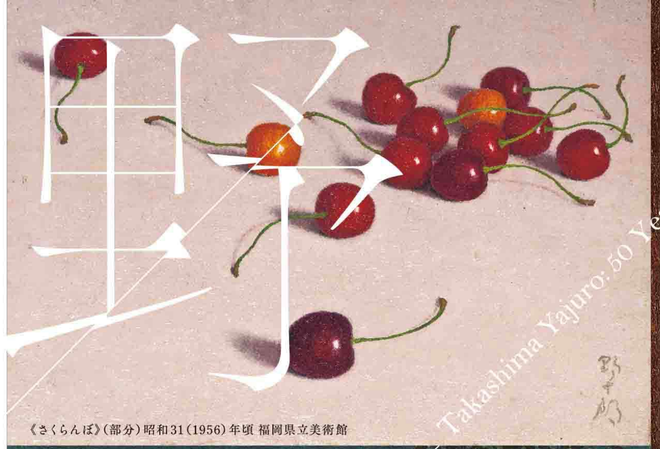
交通アクセス
［電車］○京阪：中之島線 渡辺橋駅（2番出口）より南西へ徒歩約5分 ○Osaka Metro：四つ橋線 肥後橋駅（4番出口）より西へ徒歩約10分 ○JR：大阪環状線 福島駅／東西線 新福島駅（2番出口）より南へ徒歩約10分 ○阪神：福島駅より南へ徒歩約10分
［バス］○大阪シティバス：JR大阪駅前より53号・75号系統で「田蓑橋」下車、南西へ徒歩約2分 ＊お帰りのJR大阪駅方面への便利なバス停は「渡辺橋」です。
［駐車場］有料駐車場あり（割引サービスはございません。）
＊詳細は大阪中之島美術館公式サイトをご覧ください

大阪中之島美術館
NAKANOSHIMA MUSEUM OF ART, OSAKA
〒530-0005　大阪府大阪市北区中之島4-3-1
https://nakka-art.jp

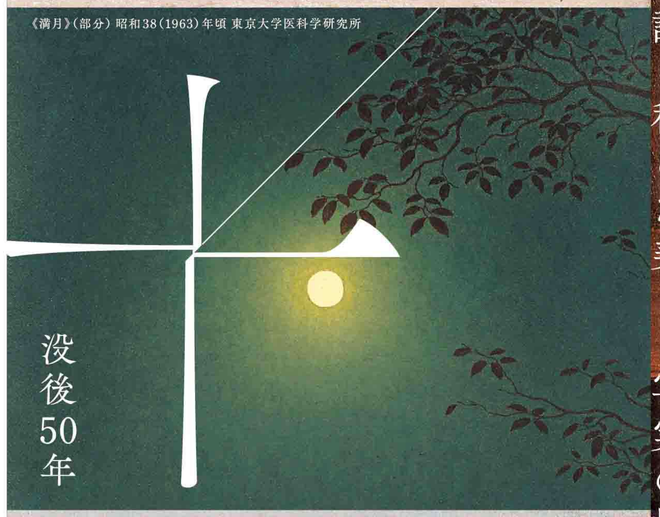
問い合わせ先
TEL: 06-4301-7285（大阪市総合コールセンター）
受付時間 8:00-21:00（年中無休）

展覧会公式サイト
https://takashimayajuro50.jp

@yajuro50



《さくらんぼ》（部分）昭和31（1956）年頃 福岡県立美術館



《満月》（部分）昭和38（1963）年頃 東京大学医科学研究所

《蝋燭》（部分）大正時代（1912-26）福岡県立美術館

《業の花》（部分）昭和40（1965）年 ブルーミング中西株式会社

《睡蓮》（部分）昭和50（1975）年 福岡県立美術館
すべて高島野十郎作

高島野十郎展

Takashima Yajuro: 50 Years after His Passing

謎を秘めた美しき写実の極致。

没後50年

大阪中之島美術館
NAKANOSHIMA MUSEUM OF ART, OSAKA

2026.3.25 wed – 6.21 sun　会場｜大阪中之島美術館 4階展示室

休館日｜月曜日 ＊4月27日［月］、5月4日［月・祝］は開館　開場時間｜10時～17時（入場は16時30分まで）

主催｜大阪中之島美術館、毎日新聞社　協賛｜大和ハウス工業　協力｜ブルーミング中西

静かな感動を呼ぶ代表作の数々。大阪初の回顧展、初公開も含めた160点超を展示！

高島野十郎（1890−1975）は、「蝋燭」や「月」などを独特の写実的筆致で描いた福岡県久留米市出身の洋画家です。没後50年の節目に開催する本展は、代表作はもちろんのこと、初公開も含めた160点超を展示する過去最大規模の回顧展で、大阪では初めて開催されます。「孤高の画家」と呼ばれてきた野十郎の芸術が形成されたルーツを遡り、青年期や滞欧期の作品など、従来の展覧会ではそれほど大きく取り上げられることがなかった部分にも焦点を当て、その芸術の真髄に迫ります。

この写実には何かある——目を凝らすほどに浮かび上がる謎

妖艶な美しさ

《からすうり》
昭和10（1935）年 福岡県立美術館

野十郎の主要なテーマのひとつである静物画。なかでもカラスウリは何度か用いたモチーフで、代表作のひとつに数えられます。カラスウリの朱い実はまるで浮かんでいるような軽やかさがある一方、なまめかしくも美しい、独特の雰囲気を醸し出しています。

命の盛りと終わり

独り身の気楽さもあってか、好んで各地を旅した野十郎。海を背景に秋の花々を描いた作品ですが、右側には二輪の枯れたヒマワリが。枯れた花の種は地中に根付き、また花を咲かせる、そしてまた…。命があるものはいつか果ててしまうものの、次の命となって生まれ変わるという世界を表現しているのでしょうか。

《海辺の秋花》
昭和28（1953）年頃 個人蔵

一粒の小さな真珠

《菊の花》
昭和31（1956）年 個人蔵

「花一つを、砂一粒を人間と同物に見る事、神と見る事」と述べた野十郎。よく見ると菊の花はほぼすべて手前を向き、まるで私たちが花から見つめられているようです。花瓶の前には意味ありげに置かれた一粒の真珠。単なる静物画ではない、様々な意味が読み解けます。

見つめられる私たち

野十郎の風景画は現実の風景に取材しながら非現実の雰囲気をただよわせます。風にそよぐことなくまっすぐとこちらを見る菜の花は、ありふれた春の光景でありながらも日常を超えた何かを感じさせます。花のそばで舞い飛ぶ白い蝶もまた意味ありげに見えます。

《菜の花》
昭和40（1965）年　ブルーミング中西株式会社

すべて高島野十郎作

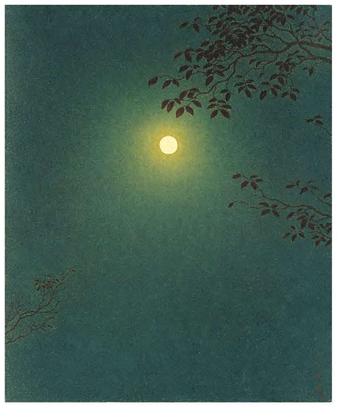
たまたま？わざと？

《割れた皿》
昭和23（1948）年以降 福岡県立美術館

粉々に割れた赤絵の皿。たまたま割れてしまったのか？わざと割ったものなのか？なぜこの皿を描いたのか？次々と謎が生まれます。このように、野十郎には、なんらかの意図があるように見えながらもその真意がわからない、まるで禅問答のような作品がいくつもあります。

闇を描くために月を描く

光と闇は野十郎が追求し続けたテーマで、多くの連作が生まれました。写実によって闇を描くという一見すると不可能にみえる行為は、仏教的な関心とも繋がっていると考えられています。月をテーマにした作品は徐々に周囲の風景が捨象され、ただ暗闇に輝く満月だけを描くという、極めてストイックな画面へと変化していきます。



《満月》昭和38（1963）年頃
東京大学医科学研究所

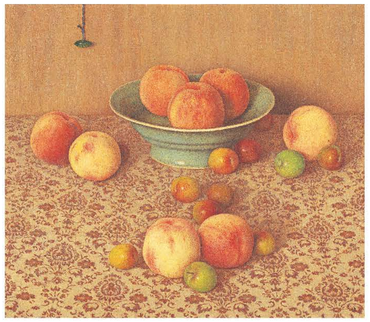
変色した一粒

野十郎がたびたび描いたサクランボ。愛らしい作品であるものの、よく見ると一番手前に置かれたサクランボは黒く変色して腐りかけているようです。一番目立つ場所にあえて変色した果実を置いたのは偶然？それとも必然？

《さくらんぼ》
昭和32（1957）年 個人蔵

計画された静物画

《桃とすもも》
昭和36（1961）年 個人蔵



野十郎の描く静物画は、ものの配置や明暗が念入りに計画されており、本作では、みずみずしい桃とスモモがいくつものV字を構成しながら配置されています。左上にぶら下がった緑の玉は一体何？野十郎の静物画ではときおり緑色の玉や真珠の玉が一粒だけ描かれ、見るものの想像をかき立てます。

《蝋燭》（左から）昭和23（1948）年以降 福岡県立美術館、昭和23（1948）年以降 個人蔵、昭和23（1948）年以降 個人蔵

野十郎芸術の真骨頂にして最大の謎

野十郎は生涯にわたり、飽きることなく蝋燭を描き続けました。しかし、これらの作品は個展で発表されることもなく、親しい友人やお世話になった人に感謝の気持ちとともに贈られました。決して消えることのない永遠の炎を描きたかったのか、あるいは炎が消える最後の瞬間を描いたのか、想像は尽きません。